
Hatsuboshi
Dosukebe
Festival

目次

一　わたしに向いていないもうひとつのこと　5
二　わたしはそれを我慢できない　55
三　教え子チンポに恋をした　87

あとがき　130


一
わたしに向いてない
もうひとつのこと

一　わたしに向いていないもうひとつのこと

「おっ♡　ほっ♡　ほっ♡　ぉヴ〜〜〜ッ♡　ぉッ♡　ほぉぉおお♡♡♡」

プロデューサーとのえっちはいつも命懸け。普段なら使わない筋肉が悲鳴を上げて、どこもかしこも攣りそうになっていしまう。

普段は「透きとおっていて、どこかに消え入りそう」なんて言われている声も、喉から振り絞るような低音を発していた。いつも、えっちの後は、ガラガラになっていて、「ひゅーっ、ひゅーっ」と喘鳴を繰り返しながら咳き込んでしまう。

でも、それも仕方のないこと。プロデューサーとのえっちはいつも気持ちよすぎるくらいで、やめようだなんて思えるはずもなかった。

「あッ♡　あぁッ♡　おっ♡　おほぉッ♡　ほッ♡　ぉッ……♡　ぃ……ッ、ィぎゅッ♡　おヴッ♡　ンおォォ……ッ♡」

大きくせり出した亀頭が、段差の深いカリ首が、禍々しく反り返ったエラの部分が、わたしの狭い膣道を、ゴリゴリこそげとっていく。先っぽが抜けそうになるくらいまでずるりと引き抜かれて、ながぁいおちんぽを活かした深いストロークで、一気に最奥まで叩きつけられた。

おなかの中を根こそぎ持っていかれるような喪失感、それを満たしてくれるような満足感が交互に襲ってくる。おまんこから溢れ出た液体でぐちゃぐちゃになった結合部が重く湿った音

を立てた。

「かひゅッ……ぐぢっ♡　おぉっ♡」

おまんこの奥の方に、おちんぽが乱暴に叩きつけられて、一気に膣奥まで抉られたせいで、肺の中にあった空気が、ぜんぶ外に出てしまう。胃の中身までは出さないように、必死にこらえた。

そんなプロデューサーも、えっちが始まった時は優しい。わたしの腕くらいはあるおちんぽ。挿れる前にはちゃんとわたしのおまんこが壊れないように、しっかりとほぐしてくれる。今日だって、そうだった。

プロデューサーの太い指でとろとろにさせられて、物欲しそうにヒクヒクと震えるおまんこに、馴染ませるようにゆっくり擦りつけて、大きく膨らんだ先端を根気強くわたしのおまんこに挿れていく。

快楽を我慢するように、わたしをめちゃくちゃにしたい欲求を抑えるように、必死になって眉間に皺を寄せ、唇を噛み締めながら腰を押し出していく。ピンク色の薄いゴムをミチミチと漲らせて、わたしのおまんこに、自分のカタチを覚えさせるかのようにじっくりと挿し込んでいく。

辛抱強く腰を進めて、その間もぷっくりと膨らんだ乳首を擦ったり、労わるようなキスの嵐を降らせたり、あの手この手でわたしが辛くならないように、快楽を与えてくれた。

わたしとしては、一気に膣奥まで突っ込んでくれてもいいんだけど。じっくりプロデューサーに染め上げられていくのも、それはそれで悪くはなかった。

もはや彼の指とおちんぽでしかイけない身体にされているようで――彼のおちんぽから離れられないようにされているようで――今までの自分の価値観がすべて塗り替えられてしまうようで――とても、倒錯的な気持ちになる。

疼くような甘美な痺れに腰を戦慄かせて、わたしのおまんこからはとろとろと粘り気のある液体が漏れていく。

キスによって抵抗の少なくなった膣内をおちんぽがミチミチと押し広げていった。そのまま最奥まで突き刺しされ、コツンと先端が子宮口に当たる。ようやく、一番膣奥まで飲み込めた。

最奥まで到達しても、まだ少しだけ、プロデューサーのおちんぽは、根元の方が余っている。わたしの身体に対して大きすぎるおちんぽ。がんばってぜんぶ飲み込もうとしても、苦しくて、今はまだ、できない。

これでも、前よりは深く入っているのだから、わたし向きではないおっきなおちんぽも……いつかぜんぶ飲み込めるのかも、しれない。

プロデューサーがグイっと腰を押し付け、じっくりと馴染ませるように膣道を押し広げる。肉付きの薄い腹を押し上げるように、おちんぽのカタチが、くっきりと浮き出ていた。

プロデューサーは、ここでも腰をすぐには動かさない。ちゅっ、ちゅっ、とわたしの首筋に

キスを落とし、最奥に亀頭をめり込ませて押し付けるようにして固定される。コリコリとした箇所に先端が触れた。

馴染ませるように、じっくりとおちんぽのカタチを教え込む。浮き出たおちんぽをおなか側から優しく撫でられて、あまりの多幸感にパチパチと脳裏に火花が散った。

『ひゃうぅぅっ♡　ぁん、んぅぅ……♡』

甘ったるぅい嬌声が口から漏れる。おなかいっぱいにぶっとい異物（おちんぽ）を詰め込まれて、本当は苦しいはずなのに……とても、気持ちが良かった。

声に媚びが混じり始めると、ようやくプロデューサーが少しずつ腰を動かす。急に強く動くのではなく、徐々に揺らすように、焦らすように、動かしていく。

ただ、押し付けられているだけなのに、キュウキュウとおちんぽに絡みつくようにおまんこが蠢いてしまう。ゆっくりと上下左右に揺らされているだけなのに、わたしの腰はビクビクと跳ねあがってしまった。

ピストン運動ではなく、ねちっこく膣奥（おく）に亀頭を擦り付ける動き。唇にするのと同じように、子宮口と亀頭が艶めかしく、深いキス（ディープキス）をした。

『んっ、あっ♡　んんっ……んぅっ、ぁ、んぅぅぅぅっ……♡』

とろとろに緩み切ったおまんこの奥から、粘ついた液体がどろりと溢れていくのを感じる。先っぽが、より深く子宮口へ擦り付けられて、それに呼応するかのように膣肉が収縮をして、

きつくおちんぽを締めあげた。

亀頭が膣奥のコリっとした部分を擦り上げる。それだけで……わたしの身体に大きな衝撃が奔り、腰がガクガクと震えてしまった。

反射的に身体を揺すって快楽を逃がそうとする。わたしの腰を、プロデューサーがっちりと押さえ、それに負けじとおまんこが、ギリギリとおちんぽを締め付けた。歯を食いしばって耐えたプロデューサーが、小刻みにおちんぽを揺らし、さらに奥を刺激する。

『あっ♡　あっ♡　あっ♡　あぁぁっ♡』

だらしなく舌が出てしまう。肌に大粒の汗が浮かび、全身を痙攣させた。ピン、と硬直した足の先まで快楽のさざ波が通り抜け、糸が切れるようにぐったりと身体から力が抜けていってしまう。

『篠澤さん、大丈夫ですか？」

『……ひゅー……ひゅー……ぜひっ、ごほっ、ひゅーっ……」

力尽きて大の字で倒れ込むわたしの頬を、気遣うようにプロデューサーが撫でる。まだまだ硬さを保ったままのおちんぽが、膣内で存在感を示していた。

肩で息を整えて、ゆっくりと頷く。「いいよ」と掠れた声で呟くと、プロデューサーがまた、ゆっくり腰を前後に動かし始めた。

『んっ♡　んっ♡　んっ♡』

たんたんたん、リズミカルに腰が打ち据えられる。おちんぽが何度もおまんこの中を出たり入ったりを繰り返す。じゅぶじゅぶといやらしい音を立てる結合部。泡立った粘っこい液体がボタボタと零れ落ちた。

エラばったカリ首が肉襞を抉って、腰を揺すって膣奥を抉るように穿つ。お互いの肌がぶつかり合うたびに、溢れた愛液がべちゃべちゃとえっちな音を響かせた。

『あっ♡　んうぅっ♡　ぅん♡　だめ♡　またイッちゃ♡　イッちゃうっ……♡　あっ♡　あっ♡　あっ♡　ひゃあぁぁっ♡』

『ほっ♡　ひぃっ♡　だめっ♡あっ♡あっ♡ひゃぁぁ♡♡　あぅ♡♡　ぅぅ～～～♡♡♡』

『ひっ♡ひっ♡ひっ♡　イッッッ♡♡　おっ♡おぉ♡イく♡イく♡ぅぅぅ～～～～♡♡♡♡♡』

切羽詰まった嬌声をあげるわたしに構わず、何度も何度も腰を打ち据える。最初は優しく、壊れないように抱いてくれるプロデューサーも……途中からは歯止めが効かなくなって、獣のように腰を振るようになってしまうのだった。

スローペースだった動きが、だんだんと早くなって、ベッドが悲鳴をあげるように軋んで、肉を打ち付け合う重く湿った音が、部屋に響き渡った。

何度も何度もイかされ続けて、腰をぶるぶると震わせる。焦点の合っていない視線が、虚空をさまよった。執拗に膣奥を小突くおちんぽが、かろうじてわたしの意識を繋ぎ止める。

——そして、今。

「んぉおおっ♡♡　おぉ、おっ♡　おほぉッ♡　ほッ♡　オッ……♡　イ……ッ♡　まッ♡　まっへ♡あひッ♡　んおッ♡　しぬっ♡　しんじゃう……♡♡♡」

「すみません、篠澤さん……ッ！　もう、少しッ、ですから……ッ！」

——ほら、止まってくれない。

でも、わたしも——本当は少しだけ余裕がある。それなのに、プロデューサーが謝りながら必死になって腰を振る顔が好きだから、余計にこんなことを言ってしまう。

眉間に皺を寄せ、申し訳なさそうに顔を歪めて、後悔が快楽に飲み込まれていっていく瞬間の顔が……たまらなく、好きだった。

わたしを抱き潰してしまった後の、後悔に塗り潰された顔を見ていると……幸せな感情が胸の奥から湧き出てくる。

——プロデューサーの鬼畜、悪魔、淫獣。でも、プロデューサーの……苦しそうな顔は、大好き。

「篠澤、さん……っ、しのさわっ、さんっ、ひろ……っ、ひろ……っ!!」

「あぁ♡　おおっ♡　イグッ♡　おあ♡　ほぉおおお♡」

急な刺激に目が眩む。バチバチッと瞼の上に稲妻が奔った。プロデューサーのおちんぽが、おまんこの一番気持ちの良いところを直撃する。容赦なくゴリゴリと抉られて、眼球がぐるりとひっくり返るような衝撃を受けた。

だらしなく涎を垂らしながら、プロデューサー（大好きな人）に深イキアクメ顔（みっともない）を晒してしまう。彼が――綺麗だ、と言ってくれたわたしは、もうどこにもいなかった。

「おっ♡　おほぉっ♡　ほっ♡　ｵｯ……♡♡　ｲ……ッ、ぎゅっ♡♡♡　ｲｯ♡♡　ンおぉぉ……ッ♡♡♡」

ゴチュンッ♥と膣奥（おく）を貫いた彼のおちんぽが、根本の方からビキビキと膨張する。先っぽが大きく膨らんで煮え滾った欲望が堰を切ったように流れ込んでくる。熱く蕩け切ったおまんこが、彼の赤ちゃんの素を求めて、おちんぽをぎゅうぎゅうと締めつけた。

射精しながらも、腰を打ち付け続けるプロデューサー。一突きごとにぼびゅっ♥ぼびゅっ♥とおまんこから飛沫があがる。絞り尽くすように精を吐き出し、ようやくプロデューサーが膣内（ナカ）からおちんぽを引き抜いた。

カクカクと無様に痙攣するわたしの腰はまだ絶頂の余韻が収まりきっていない。ぶしゅっ♥ぷしゃっ♥と愛液を撒き散らすわたしの目の前に、水風船みたいに先端が大きく膨らんだゴムが投げ捨てられる。

一度射精しても、まだまだバキバキに勃起したままのプロデューサーのおちんぽ。もう我慢できないとばかりに、新しいゴムが被せられた。

「かひゅ、ごほっ……ひゅー……ひゅー……ぷ、プロ、デュ……サー、す、少し……やすませ、ぎッ♡んおおっ♡おほぉっ♡　ほっ♡　ｵｯ……♡　ほおぉぉーーーーー～～～～～ッ♡」

ぐったりと力を失って、ベットにうつ伏せに倒れ伏したわたしに構わず、もう一度おちんぽがねじ込まれる。逃げるような元気もないわたしは——ただされるがままに、おちんぽを受け容れた。

ドロリとした粘度の高い愛液が、屈服の証とでもいうかのように……次から次へと溢れ出す。杭を打つように容赦なく叩きつけられる本気ピストン。声が枯れてしまうくらい泣き叫ばされ、カクカクと無様に痙攣する腰はまだ絶頂の余韻から解放されていなかった。

「あッ♡　あッ♡　あひッ♡　あぁッ♡　んッ♡　だめ♡　しぬッ♡　しんじゃうッ♡　おぐっ♡　まッ♡　いっかいとまっ♡　てぇ♡　ほッ♡　ほッ♡　オォ～～～～♡　イグゥゥ♡　おッ♡　おぉッ♡　またイグッ♡　イクッ♡　イグッ♡　イッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♡」

そのまま何回も何回も、おまんこをイジメられて——壊れてしまうほどの快楽に身を任せてしまう。泣いても、叫んでも、一心不乱に腰を振り続けるプロデューサー。彼も、わたしとのえっちに夢中になっていた。

——ふふ、プロデューサー……わたしのこと、好きすぎ♡♡♡

苦しくて、壊れてしまうそうなはずなのに……どこか多幸感に満ちていた。

動きを止めないプロデューサーは、わたしの意識が朦朧としはじめても、腰を振り続ける。力の抜けたわたしの身体をめちゃめちゃに蹂躙する彼の存在を感じながら、わたしは——

静かに意識を手放した。

♥　♥　♥

今でこそ――それこそ毎日毎晩シてしまうくらいにはプロデューサーとのえっちにハマっているけれど、最初はぜんぜん上手くいかなかった。

『プロデューサー。そろそろわたしたちは、次の段階に進んだ方がいいと思う』

『――……次の段階、とは？』

『プロデューサーは、わたしの希望がわかっているのに、一向に手を出さない』

『……アイドルとプロデューサーの関係として、あるまじき行為……ですから』

『そういうのは、いい。付き合ってる時点で、手遅れ』

『プロデューサー。セックス、したい』

『……はい』

プロデューサーとそういう関係になって、渋る彼をわたしから誘って、ようやくアイドルとプロデューサーとして、あるまじき行為をすることになった。

わたしの身体に気を遣って、最後まで乗り気ではなかったプロデューサー。「折れてしまいそうで不安です」だなんて、抱きしめることも躊躇していたくらい。